令和5年度 佐賀医科大学・佐賀大学医学部同窓会 講演会

講演会 講師のご案内

医学科14期生

大曲　貴夫　先生

国立国際医療研究センター病院
国際感染症センター長

COVID-19の臨床

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）では、国内での第5波までの臨床像（前期）と6波以降（後期）では臨床像が異なっている。前期においては全体の80%の患者は軽症もしくは無症状であり、20%前後の患者では発症後1週間前後から咳や高熱が出始め、呼吸不全を来す。甚だしい場合には進行性の呼吸不全を来たし、新規陽性者の1%前後で人工呼吸や膜型人工肺による治療必要になる場合がある。後期は流行株がオミクロン株に移行し、かつ国民のワクチンの２回以上の接種率が80%を越えた時期である。全体として重症化リスクは低下し、呼吸不全を来す患者は全体の1%未満に、人工呼吸が必要となる患者は全体の0．04%程度まで低下した（東京都の実績）。第6波以降は呼吸不全が原因で入院となる患者数は著しく低下したが、高齢や持病があるなどの理由で全身状態が悪化し入院を必要とする患者が増加した。また介護施設等に入所中の患者で軽症もしくは無症状の患者が、施設では医療提供や十分な感染防止対策が出来ないなどの理由で入院重点医療機関に入院することも多かった。

COVID-19の社会全体に対する影響は甚大であった。現代でもスペイン風邪と同じ問題が起こることが示された。超高齢社会である日本において、甚大な数の患者が発生する新型呼吸器感染症が医療や介護に与える影響が極めて大きいことがわかった。今後これらのリスクに備え対応出来る医療介護体制、地域医療体制が構築される必要がある。また感染症の脅威下でも人間らしい生活をしながら社会生活を維持できるようなインフラ作りも進んでいくと思われる。

看護学科14期生

田中　沙恵　先生

外務省
国際協力局国際保健戦略官室主査

国際保健というフィールド（仮）

私は看護師として病棟に勤務した後、大学院進学を機に国際保健分野にキャリアチェンジを行い、現在は外務省の国際保健戦略官室というところに勤務しています。学部卒業後、あっという間に13年が経ち、気が付けば病棟看護師として勤務した年数よりも国際保健に関する勤務年数の方が長くなっていました。

国際保健というと、難しそうな印象を持たれたり、どこか遠い世界の話のように思われたりすることが多いのですが、一度齧ってみるとやめられなくなる方が多く（私もその一人でした）、かつ看護師・医師等が自然と身につけている能力を活かせる分野でもあります。

まだまだ勉強中の身で恐縮ですが、この機会に私がすっかりはまってしまった国際保健というフィールドの魅力を少しでもお伝えすることができ、今後国際保健にご関心をもって下さる方が増えたらと思い、講演をさせて頂けたらと思います。